

2023年12月1日 於:ブレッドハウス
大原幽学が歩いた富岡宿から浪江宿

西村慎太郎

大原幽学とは

- ・寛政9年(1797)誕生。名古屋藩士大道寺氏出身といわれるが詳細不明
- ・天保2年(1831)房総各地を巡歴。どうやって生計を立てていたかも不明
- ・天保6年(1835)下総国香取郡長部村(ながべ。現在の千葉県旭市長部)を訪問して、「性理の学」を農民たちに教え、**同13年以降は長部村を拠点とした**
- ・「性理の道」とは、神・儒・仏を合わせて家の存続、礼節などを説いた道徳
- ・農業技術の改良も進めて長部村や近隣の村々が荒廃から立ち直った
- ・嘉永4年(1851)関東取締出役によって幽学が築いた「改心楼」(性理の道の教導所)取り締まり。のちに安政4年(1857)有罪となる
- ・安政5年3月7日切腹して62歳で死去

大原幽学『道の記』天保13年(1842)正月23日(『大原幽学全集』、千葉県教育会、1943年)

富岡油屋瀬左衛門泊り、明る二十三日早旦に出立して、二里程来りて堺明神とて小社有り、此所に松桜のあるを先年は見しが、此度は知らず通りぬ、次に磐城・相馬の堺川とて、細き川を越え、富岡より熊川宿へ一里半也、夫れより熊川を越えて、並木に上る所の左に屋舗有るは館の跡と云へり、此所を越えて、熊川宿より二里、新山宿を越え、野か原の如くなる荒地有るは、二十七・ハケ年以前、三ヶ村津浪にとられ、如斯と云へる也、又去る饑飢の節、死絶えたる家悉く破れ、或は田地荒れて、武蔵野に齊し、そが中にも**高野宿**の前後は、取別け甚だしく、田地は野原と思しき中に、僅に十分の一も有りや無しや也、いかにも哀なるさま也、能く聞くに、此国は都べて寒き国故、暖国とは異にして、世並違作多し、九ヶ年凶作続きたるうへに、申年・酉年の両年は、稻植えたる儘にて穂一切無しと、依而米一升代銀一朱の上せしとぞ、金有る者も飢ゑたる有りとぞ、此所道の右に

陸奥の高瀬清水来て見れば葵のくきの北にこそなれ

の碑あり、西行の歌と云へり、此所葵の松とて名所也、是も此度知らず通りぬ、夫れより**高野宿**及びすや中喰する也、新山より**高野**へ一里半也、

現代語訳

富岡宿の油屋瀬左衛門に泊まり、明けて23日早朝に出立して、2里(約8km)ほど来ると堺明神という小さな神社があった。このところに松桜があるのを以前は見したが、このたびは知らないで通り過ぎた。次に磐城・相馬の堺川という細い川を越え、富岡より熊川宿へ1里半(約6km)である。それより熊川を越えて、並木の上ったところの左に屋敷があるのは館の跡ということだ。このところを越えて、熊川宿より2里、新山宿を越えて、野原のような荒地があるのは、27・8年以前に3ヶ村が津浪に遭って、このようになったと伝えられている。また以前の飢饉の時、死に絶えた家はことごとく崩れて、あるいは田んぼは荒れて武蔵野に等しい。その中でも**高野宿**の前後は特に甚だしく、田んぼは野原と思う中にわずかに10分の1もあるかないかだ。いかにも哀なる様子である。よく聞くとこの国はどこも寒い国なので、暖かい

国とは異なり、日ごろから凶作が多い。9年間凶作が続いた上で、申年・酉年(天保7年・8年)の兩年は、稲を植えたままで稲穂は一切実らなかった。よって米1升の代金は金1朱以上したという。金を持っている者も飢えた人がいたという。このところの道の右に

陸奥の高瀬清水来て見れば葵のくきの北にこそなれ

という碑がある。西行の歌という。このところ葵の松という名所である。これもこのたび知らなくて通り過ぎた。それより高野宿 及びすやにて昼食をした。新山宿より高野宿へは1里半である。

高瀬の清水(2021年5月5日撮影)



大原幽学が見た富岡宿から浪江宿

- ・新山宿を越えてた土地が荒地で、27・8年以前に3ヶ村が津浪に遭った
 - ・天保の飢饉で田んぼが荒地となり、天保7年・8年は一切稲穂が実らず
 - ・高野宿(浪江宿)の前後は荒地が甚だしい
 - ・西行の「陸奥の高瀬清水来て見れば葵のくきの北にこそなれ」の石碑あり
 - ・高野宿(浪江宿)及びすやにて昼食
- ※江戸時代から大正時代半ばまで営業していた旅館恵比寿屋のことか(大津孝吉)

一般社団法人

浪江町地域文化フォーラムホームページ



西村慎太郎ブログ

「大字誌 浪江町権現堂」執筆日誌



一般社団法人

浪江町地域文化フォーラムブログ



西村 慎太郎

(E-mail haniwa28@hotmail.com)

人間文化研究機構国文学研究資料館教授

一般社団法人浪江町地域文化フォーラム理事
大熊町社会教育複合施設整備検討委員会委員
富岡町アーカイブ施設整備識者検討部会委員